農村通信方式

保存版 No.1

イネづくりの基本技術「品種特性と設計」

何ごともそうであるように、目標を定め、その目標を達成するための仕事の段取り（栽培計画）が大切である。

栽培計画が決まれば目標の50～70％は達成されたと言っても過言ではない程に重要な作業である。

ここではイナ体の仕組みや品種特性を分かり易く記述し、栽培計画の参考にして頂ければと思う。

―松浦　一宇―

図1．収量決定の条件（松浦）

安定生産の三大要素

図1に示す通り、米づくりにおいて気象条件が大きく影響することは周知の通りで、例えば山形県においても内陸部は（大陸性の気候）、庄内は（海洋性の気候）で、特に夏の夜温が高すぎることから穂重型品種で登熟歩合の低下に繋がり易く、穂数型品種が適するといった過去の事例からも理解されるように、地域〈〉の気象条件に適した品種を選ぶことが大切である。

次に遺伝的に持っている品種の能力をしっかり考えた品種選びが重要である。

三大要素の内、作る人の能力、いわゆる栽培技術が最も重要なのはいうまでもないので、これまでもおしみなく記述して来たが、尚、集約し記載する。

品種特性に則した施肥設計が基本

その昔、「青田褒めるは馬鹿褒める」と言われたほどに、青田の作り過ぎを戒められたのは長大になり過ぎ、出穂後に倒伏などしてしまうと光合成が損なわれて「クズ米」作りで終わってしまう危険性を説いたものであり、イネの生理に合わせたV字理論が生まれ、分施法による施肥体系が確立されて、これまで良質米の安定生産技術として継承されてきた。特に昭和50年代（ササニシキ全盛期）は、反収日本一を2年連続達成するなど庄内が輝いた時期であった。

さて、時代の変化も大きく、大規模化による省力栽培の必要性の高まりと化学肥料の進化等もあって、基肥一発施肥体系も普及の一途を辿っているようである。

一人でせいぜい3～4町歩規模でやれた分施法を無理矢理やれとはいかない現実がある。

品種改良も進み、図2に示す通り伸長節間の伸びにくい品種もつくり出されており、特に伸びにくい品種には基肥一発肥料をやや控え目に施し、不足分を穂肥時期に少量補填するといった方法で、気象変動にも振り回されることもなく毎年安定生産に結びつけている事例も多く見られる。

庄内・由利地域は穂数型品種が有利

昔から天気は予想が難儀であることから、作占いの神事もおこなわれていたほどである。

リスクを最小限にするための知恵として、3～4町歩程度の経営規模であった時代でも、早生・中生・晩生と出穂期ごとの組合せをするように教えられたものである。

昔は冷害との闘いであり、低温障害を受け易い花粉母細胞分裂期をずらすことに工夫された歴史がある。

地球温暖化の影響が大きく、白粒等による品質低下や暑すぎるためにイネの消耗による登熟不良で減収といった傾向にある。

前述した高温障害をなるべく少なく（回避）するため、それらに強い品種選定が重要である。

ササニシキ時代から体験した事柄であるが、夜温も高く温度較差の少ない庄内・由利では穂数型品種が有利である。また、筆者の長い体験からの私見であるが、伸長節間の伸びにくい「はえぬき」「つや姫」「雪若丸」が高温にも強いように感じているところである。

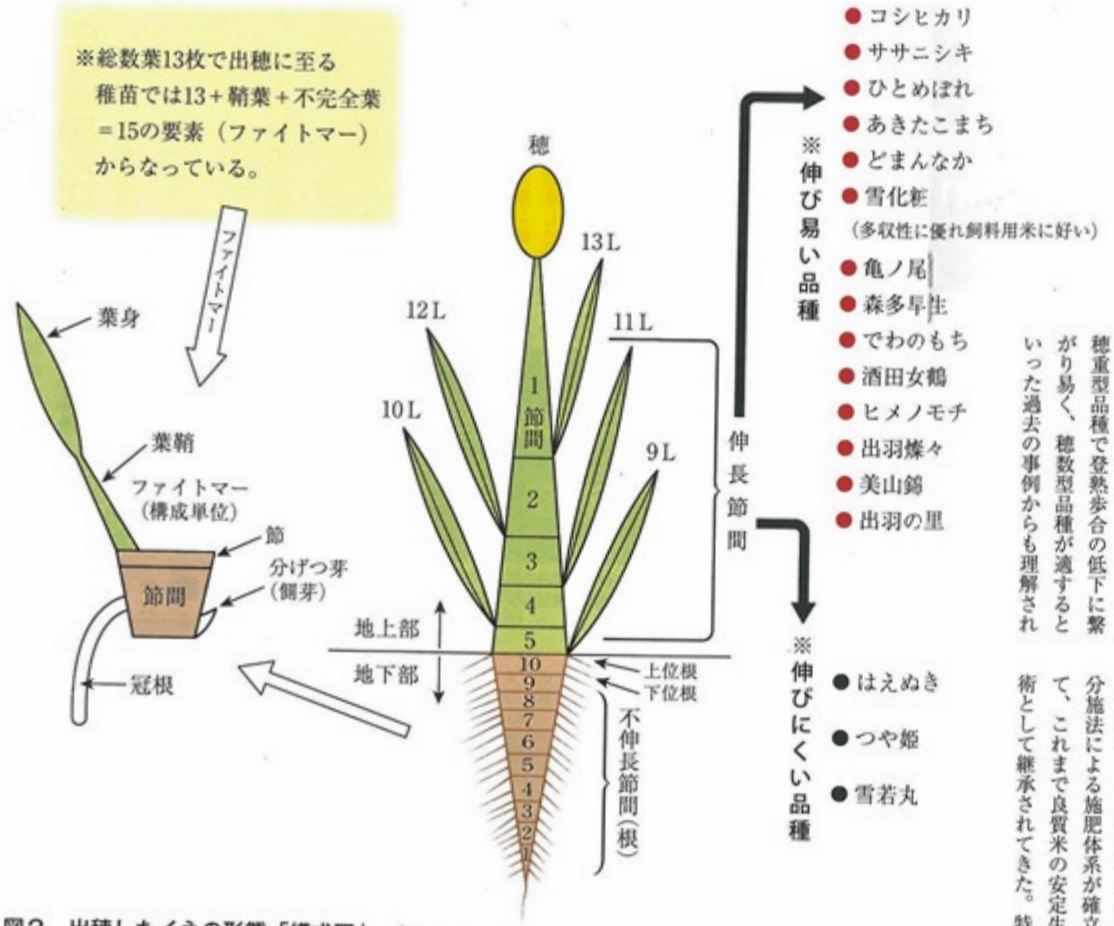

図2．出穂したイネの形態「模式図」（川田氏著 イネの根を参考に松浦作図）